

社会課題の解決図る 理工系人材を育成へ



Jamboardを活用して
グループワークに取り組む生徒たち



稲垣 忠
東北学院大学教授

主体的に学ぶ姿勢が育つ

本年度から共学化と
新カリキュラムが始ま
った本校の魅力は、教
員の探究力にある。平
成29年、新校舎への移
転とともに教員および
生徒1人1台の端末を
整備し、ICT活用を
進めてきた。端末の持

ち帰り、反転授業など
の取り組みが、コロナ
禍でも学びを継続する
た。

ITとGCからなる
二つの探究学習の開発
を試し、課題の配布・
回収、質問への回答、
授業の配信などを試行
し、教員共通の実施事

件。隔週でITとGCの授
業を実施している。

GCは「TOYOASOBI
B-I」からスタートする。異
なる地域から集まつた1年
生が、学校周辺(豊洲・湾岸
地区)のさまざまな人と関
わり、地域について学び、考
えたことを伝える解剖図鑑
の作成に取り組んでいる。

本年度の1学期は、コロ
ナ禍で思い通りの活動がで
きない部分もあった。その
ため、1人1台端末を効果
的に活用し、企業の人とオ
ンラインで交流するなどの
工夫を凝らした。

7月には初のハイブリッ
ド型学習発表会を今まで関
わりのあったステークホル
ダーと学内に公開。成果の
授業実践は本年度から本格
的に行っている。

昨年度は、教員が探究に
ついて学ぶ研修などが中心
だった。同時に、探究を通
じて獲得したい力をまとめ
た「SHIBAURA探
究」では、夏休みの宿題
化の一
つは、夏休みの宿題
がドリルではなく、探究の
課題になつたこと。従来は
夏休み明けにテストを行
い、順位を通知していた。

その根底には、「育てた
い生徒の力の共有があつた
からこそ」と指摘する斎藤
教諭。教科学習で問題解決
型学習を取り入れ、評価し
たいという話があると、金
森教諭は「特別研究指定校
としての成果を実感する」と
話している。

こうした研究を通して、
教職員の授業への考え方や
・3520-8501

がベースの「SHIBA
RA探
究」を導入。学校の
実態として、研究代表者の
金森千春教諭は「元々男子
校で知識重視の授業も少な
くなかったため」とも話す。

ITとGCのプログラム
二ヶーション)だ。週2回をバラン
ス良く展開し、二
ロードマップ

エンジニアの知識・技能学ぶ 国際性、多様性 身に付ける 総合探究 各自が課題設定、探究



1年生が取り組む「TOYOASOBI」の探究

総合学習で「SHIBAURA探 究」

中高大一貫教育で理工系人材育成に取り組む芝浦工業大学附属中学高校(佐藤元哉校長、中学校・生徒484人)。新学習指導要領の全面実施を迎え、中学校は本年度から男女共学(高校は移転した4年前から)になり、総合的な学習の時間で「SHIBAURA探
究」という新しいカリキュラムを1年生でスタートさせた。実践検証を行い、修正を加えながら完成を目指す。同校は(公財)パナソニック教育財団の特別研究指定校。指導・助言を行う稻垣忠・東北学院大学教授のコメントと併せて紹介する。

芝浦工業大学附属中学高校
大手企業のオフィスビルや中高大連携教育、言語教育などに力を入れてきた。社会のニーズとして、から徒歩7分の場所に新校舎ができるイノベーション人材の育成も求められている。報部長の斎藤貢市教諭。多角的に物事を考えられる思考力(デザイン思考)が欠かせないと考えた。そこで学びの質の向上を

位。隔週でITとGCの授業を実施している。

GCは「TOYOASOBI」からスタートする。異なる地域から集まつた1年生が、学校周辺(豊洲・湾岸地区)のさまざまな人と関わり、地域について学び、考えたことを伝える解剖図鑑の作成に取り組んでいる。

本年度の1学期は、コロナ禍で思い通りの活動ができない部分もあった。そのため、1人1台端末を効果的に活用し、企業の人とオンラインで交流するなどの工夫を凝らした。

ITとGCのプログラム二ヶーション)だ。週2回をバランス良く展開し、二ロードマップ

研究を通じ教育観に変化

研究のプロトタイプは、

定だつた。

新型コロナによ

りのあつたステークホル

ド型学習発表会を今まで関わりのあつたステークホルダーと学内に公開。成果の授業実践は本年度から本格的に行っている。

研究のプロトタイプは、教育観が変わってきた。変化の一
つは、夏休みの宿題化の一
つは、夏休みの宿題がドリルではなく、探究の宿題になつたこと。従来は夏休み明けにテストを行
い、順位を通知していた。課題の在り方やテストを実施するかの議論が起つたことは、数年前だと考えら
れないことだつたといふ。

は指定していない。

最終目標は「理工系の知

識で社会課題を解決」する

こと。「SHIBAURA

探究」では、高校で取り組

む総合的な探究の時間を一

年間で見つけた課題の解決

に挑む。最後には「探究発

表会」を計画しているが、

その力がキャリアデザ

インや大学の卒業論文・研

究でも発揮できることを期

待しているという。